
序 文



症状のある病変や質的診断のはっきりした病態に対するマネジメントは、近年ガイドラインできちんと規定されるようになっており、カンファレンスで主治医の先生方とガイドラインに基づき、さらなる検査法や治療方針を議論するのは放射線科医の醍醐味である。一方、読影を行っている、依頼目的とは関係のない偶発所見をしばしばみかけることがある。その病変による症状はなく、良悪性の判定が困難で、特に依頼医がその病変の専門科の医師ではない場合に、読影レポートにおいて経過観察を推奨するのか、専門科に相談することを勧めるのかを悩むことがある。経過観察とする場合は、どのくらいの頻度で画像検査を行うように提案するかも悩みどころである。

このような悩みに答えるべく、『画像診断』2016年8月号において「画像でみかける偶発的所見のマネジメント —あなたならどう書く?—」という特集号を企画し、偶発病変のレポートをどのように記載しているかを各領域のエキスパートに執筆いただいた。今回はこれを増刊号として加筆、再編集したものである。2016年の特集号においては主にCTやMRIでの読影を想定したものであったが、今回は核医学を領域として増やし、また、私の単編集ではなく、雑誌『画像診断』の発行編集委員の皆で編集を分担していただいた。この結果、2016年の特集号よりも量的にも質的にも向上したものとして上梓できたことを大変嬉しく思う。

本増刊号では、基本的には“病態や疾患の概説”，“画像所見と鑑別のポイント”，“対応の考え方”について記載していただいた。偶発所見については、American College of RadiologyのManaging Incidental Findingsに明確なガイドラインが出ている病態もあれば、総説論文の中で触れられている程度のものもあり、そして個人的見解しか書けないようなものもある。各執筆者にはガイドラインに基づく記載であるのか、複数の論文に基づくのか、個人的見解であるのかをある程度明確にしながら記載していただいた。ガイドラインに基づいているものは、可能であれば原文のガイドラインも読んでみていただきたい。個人的見解のものは、異なる意見もありえることを承知しながら、かなり勇気を持って記載してくれている。今後、このような領域の偶発所見のマネジメントに興味を持っていただける人が出てきて、エビデンスを示すような研究が出てくることを期待したい。

偶発所見のマネジメントをどのように報告するかも放射線科医の重要な役割であるため、すべての放射線科医に読んでいただきたいと思う。

2022年7月

慶應義塾大学医学部放射線科学（診断） 陣崎 雅弘
画像診断実行編集委員会
